

長年に亘り家族皆で守ってきた郷里の墓地は海を見渡せる良い場所にあります。年々お墓の傷みが目立つようになり、また山の傾斜地にある為今後の管理が難しくなることから再整備を検討していたところ、願いに叶った墓地が見つかり、これを機に改葬を行うことにしました。

改葬の内容については見積依頼書に新墓の形状・配置の他に、今までのお墓の竿石（帆）の扱い・跡地の整備要領等、私の思いの丈を記述した「概略仕様書」を添付する程に拘りましたが、各々の

森町店

神戸市 松井様

わたしも「さんわ」で建てました

事項には渡辺社長自ら対応・対処してくれましたし、以下のことから「さんわ」さんの誠意を十分に感じることができました。

- ・新墓の建立では、基礎工事・本体組立工事での工程毎の写真をメール送信する等の配慮があり、現地立会なしで当初目指していた「すっきりと上品なお墓」に仕上げられました。
- ・閉眼供養後の寄せ墓と多数の個人墓からのお骨上げをしてくださった方々は、頭が下がる程丁寧にお骨・骨壺を扱ってくれました。
- ・竿石は国東のお寺に速やかに搬送し、安置してくれました。

ちなみに、この度の改葬については全てに満足しています。これはお互い何かご縁あったのご先祖の導きかと思わざるを得ません。



前からの先祖墓 素晴らしい閉眼供養でした



新墓地に新しいお墓



国東の有名寺院がわがわが角を空けてくれました。粗末にならないようご安置



前からのお墓の整地。コンクリートなど打たずに出きるだけ自然に

ありがたい。美しい日本語の一位は「ありがとう」だという事です。「ありがとう」は人に好感を与えるすばらしい言葉の一つです。「法句経」というお経に「人の生（しよう）を受（う）くるは難（かた）く、やがて死すべきものの、今生命（いのち）、あるはありがたし」という一説があります。生命あるものは必ず死ぬ時がきます。こうして今ここに生きていくということ、自分一人の力ではなく、数多くのおかげによって生かされているわけで、どんなに難しいことであるか、と経典は説いています。人間に生まれた幸せ、生かされている幸せ、この『あるのが難しい』から、感謝の念を表す語として「ありがとう」という言葉になりました。「ありがとう」の言葉をかけ合うことで、自分の心もなごやかに、相手の心もさわやかにしてくれそうです。心の交流を潤滑油の役目を果たす言葉として、「ありがとう」はやはり美しい日本語だといつてよいでしょう。「こぼの旅」より

お釈迦さまの足あと

入滅：クシーナガル（クシナガラ） 故郷への旅

35才でさとりを開き、説法を得意されてから45年間、インド東北部の各地に布教伝道されたお釈迦さまも80才のご高齢となっておられました。お釈迦さまは自らの身体について、次のように付き添いのアーナンダ（阿難）にむかって話しておられます。



お釈迦さま四大聖地



クシーナガル涅槃堂中に涅槃像が安置

う若い朽ち、齢をかさね老衰し、人生の旅路を通り過ぎ、老齢に達した。譬わが齢は八十となった。譬えば古ぼけた車が革紐の助けによつてやつと動いて行くように、恐らくわたしの身体も革紐のたすけによつてもっているのだ。（大パリニツバーナ経 p.63）

その80才のお釈迦さまが、ラージャグリハ（王舎城）の霊鷲山から生まれ故郷のカピラヴァストウに向かって旅行を決意されます。もちろん歩いて。旅のみちづれ

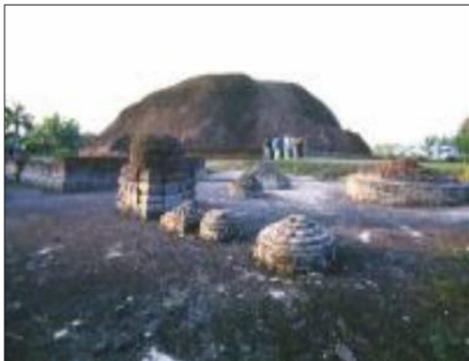


涅槃像。全長6mほどで、5世紀末のもの推定

は、ほとんどアーナンダ（阿難）一人だけだったようです。クシーナガルに着いたお釈迦さまはアーナンダにこう言います。

さあ、アーナンダよ。わたしのために、二本並んだサーラ樹（沙羅双樹）の間に、頭を北に向けて床を用意してくれ。アーナンダよ。わたしは疲れた。横になりたい。（同上 p.156）

そのあとお釈迦さまはアーナンダをはじめとする修行者たちに告げられます。「わたしが説いた教えとわたしの制し



ラムバル塔（茶毘塚）全景

た戒律とが、わたしの死後にお前たちの師となるのである」と。さらにしばらく法を説かれたあと、お釈迦さまはこう言われます。

さあ、修行僧たちよ、お前たちに告げよう、『もろもろの事象は過ぎ去るものである。おこたることなく修行を完成しなさい』と。（同上 p.158）

これがお釈迦さまの最後のことばであったと、経典は伝えていきます。仏教を開かれたお釈迦さまは、一人の人間として、安らかに最期



クシーナガルの日没

を迎えられたのです。お釈迦さまの死を入滅（にゅうめつ）といいます。これがいつであったかについても、やはりさまざまな伝承があります。中国・日本では「二月十五日」を入滅の日とし、涅槃会ねはんえんが催されます。

お釈迦様のあしあと
おわり